
MMO生活

11

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MMO生活

【コード】

N0900Y

【作者名】

11

【あらすじ】

仕事から帰宅し疲れ果てて眠りについた男は、何故か彼がプレイ中であるMMO、【アオブベーション】の世界にトリップしてしまった！・・・普通トリップ世界にトリップパーじゃないキャラクターっていないよな？倒れたらまた町に戻るってどういうシステムなの？俺はどうやったら元の世界に還ることが！？

ゲームの世界でその世界がどのように動いてるか体験する。そんなお話。

直前のお話（前書き）

超見切り発射です。続きを書くかもわかりませんが、目に留めていただき、ありがとうございます。

直前のお話

長いデスクマーチに一段落付け、俺は何日かぶりの自室に足を踏み入れた。

スーツはくたびれ、髪はボサボサ、3日入っていない体は不愉快な臭いをはなち、頬はやつれ、目は充血して目の下には隈、髭も伸びっぱなしという、なんとも哀れな出で立ちの俺は、ベッドに倒れるように潜り込み、そのまま深い眠りについた。

(明日はさっさと起きて風呂に入らねば・・・)

そんな事を思いながら・・・

ぼんやりと目を開くと、俺は自分のパソコンの前に座っていた。

眠気で回らない頭でなんとなく「ああ、久しぶりに開いたなあ・・・」などと思いつつパスワードを打つ。

聞き慣れた起動音とともに、デスクトップ画面が表示され、俺は慣れた手つきでアイコンをクリックした。

システム読み込みのゲージがぐん、と進み、スタートボタンがクリック可能になる。

久しぶり過ぎて技の名前が余り思い出せない。克蘭の皆は元気にしているだろうか……

既にキャラクター選択画面だ。キャラクターは3体。中肉中背の人間（男）、金髪でやや長身のエルフ（女）いかにもな感じのドワーフ（男）

人間の男を選択し、ゲームを開始する。

版からコツコツとプレイし続け、現在でもそれなりの高レベルなメインキャラ、久しぶりにレベル上げもしよう、ああ、新しい生産スキルも出たって言ってたっけ。

そう考える内に、ずっと一定量だった睡魔が急激に襲い、俺の視界はホワイトアウトしていった。

1 話目

まどろみからゆっくりと意識が浮上する。

ぼんやりと目を覚ました俺は朝になっていることに気づき、跳ねるように上体を起こし目覚ましがわりの携帯を探す。

やべえ！今何時だ！？

8時を過ぎていれば風呂に入れないうし9時を過ぎていれば遅刻確定だ。一人暮らしで目覚まし音のしない目覚めは相当心臓に悪い。

跳び起きた一瞬でそんな事を考えた俺は、目に入る風景に目を疑った。

「ううは・・・どこだ・・・？」

二りで買った心地よいスプリングの効いたベッドに、シンプルながらに俺好みだったモノトーンの布団カバー一式はそこにはなく、少し厚手だが目の荒い白いシートで、ベッドのスプリングも全然効いていない。（確認したら藁みたいなのがドツサリ詰めてあった）

壁は見慣れた白い壁紙はなく、手垢なんかで黒ずんだ、木の板で出来た良く言えばレトロな、ぶっちゃんけ小汚い壁。

そして床はフローリングは一緒だが、これまた酷く黒ずんでいる。

キヤスター付きの椅子と、パソコン用のL字型テーブルは木製の円形テーブルと椅子に、クローゼットは無く、頑丈そうな筆筒と、乱雑に物が入った木箱、後はゲームぐらいでしかお目にかかったこと

の無いような、宝箱のような箱がそれぞれ一つずつ隅の方に置いてあった。

そんな周囲を見渡した俺は胃の辺りに急に重いものを詰められたような感覚を起こし、全身から汗が吹き出した。簡単に言くと、パニックを起こしたのだ。

なんだこのうらぶれた別荘みたいなところ！？ヤクザか何かに誘拐されたのか！？何故俺が！？

絶叫しそうな心を抑え、ヤクザ我現れた時にどうすれば生き残れるかを必死で考える。

飛び掛かるか！？だめだ！そんな事で勝てるはずが無い！そもそもビビって足が竦かもしれん。助けを求めるか！？いやそもそも何故俺が誘拐されたかを聞きたい！嫌だ死にたくない！！

心臓が早鐘を打ち瞳孔は開いているのに目には何も写っていないかの様に頭に入ってこない。そんな状態で数時間、いや数分だったのかもしれない。徐々に俺は冷静さを取り戻し、再度周囲を確認した。

辺りはしんと静まり返り、人の動く気配はない。部屋ばかり見渡していたが、ベッドの横に窓があり、こっそりと外を覗く。

どうやらここは2階建てのようである。そこそこに高い木が窓の近くに1本、そして数十メートル離れたところから森のように鬱蒼と並んでいた。

もしもの時はこの木を伝って降りよう。木登りなんて小学生以来だ

が2階くらいだし何とかなるだろう。

そう思いながら意を決した俺は足音をなるべく立てないようにそつとベッドから足を下ろした。

2 話目

ベッドから降りた俺はまた慎重に、そろそろと足を運ぶ。煩いぐらいに脈打つ心臓。得体の知れない状況が恐ろしい。自然と呼吸が速まる。

時間をかけて着いた扉にそつと耳を宛て、こちらに近付く足音が無いことを確認し、音がならないようにゆっくりとドアノブを捻り少しだけ開く。

キィ・・・と音がなってしまいどつと汗が出たが、またしばらく気配が無いのを確認し、そつと扉の隙間を除いた。

・・・

そこには人の気配はなく、これまた木で出来た廊下が少し続き、先に階段があつた。また慎重に扉を開き、首だけを出して左右を確認する。階段の反対側には道は無く、窓のある壁際に小さな机があり、花瓶に花が活けてあつた。

そこで俺はその花瓶にデジャヴウを感じ、眉をひそめた。見たことが無いのに、無いはずなのにどこかでこの模様を見た気がする。

俺の家には花瓶なんて無いし、貰ったことも無い。家族も特に花を活けるような人はいなかった。はず。

友人の家で？見たかもしれないが、違う気がする。第一こんな家に住む友人なんていない。そして友人なんてお互い忙しくて1年くら

い会ってない。

そこでふと、別な可能性に思い当たり今度はざあっと血の気が引いた。

疲れて、どうやって帰ったかも明白に思い出せない。つまり、全くのあかの他人の家（別荘かもしれない）に侵入し、そのまま眠りのついてしまった可能性だ。

その場合、死ぬことはないが、社会的に死ぬ可能性がある。ただ疲れて帰ったはずが、豚箱行きという可能性だ。

一応スーツは着ているとはえ、連日の徹夜のせいで顔色は悪い上髭も伸びっぱなし。更にかなり臭いとなれば、ぶっちゃけ家があるのか怪しい人の完成である。これはマズすぎる。

慌てて俺は部屋を抜けだし、ハツとしてまた慎重に隣に部屋があるのを見て、その部屋の扉に耳を宛てた。

しんと静まり返った部屋は、人の気配はないが、もしかしたら眠っているだけなのかもしれない。もし人がいたら・・・

俺は再度ゆっくりりと、自分が盗人になったような気分には苛まれながらもこっそりと階段を降りた。

2 話目（後書き）

いつになったらここがゲームの世界と気づくのか・・・

心理描写好きでいい・・・

3 話目

1階にも人の気配はなく、それでもこんな状況に陥ったことの無い俺は部屋の入口のある場所をキョドキョドと見ながら玄関と思しきドアに手をかけ開いた。

すんなりと扉は開き、草の生えた青々しい庭が見えた。

すつと隙間に体を通すように外に出て、またゆっくりと閉め、俺は全力で庭を駆け抜け森の中に飛び込んだ。

道と思われる所の数メートル先に潜み、木にもたれ掛かりながらしやがみ込み、潜めていた息を一気に吐き出した。

「……っはあ！はあっ！」

死ぬかと思った！なんかもういろんな意味でダメかと思った！！よかったあああああああ！！俺生きてるっうっうっう

俺は生きている事への喜びと抜け出したことへの達成感でハイになった。ガチでフヒッ！！ブヒヒッ！！など音を立てながら息を調える。

そしてヒュウヒュウ鳴っていた呼吸が落ち着いた所で深呼吸し直し自分の現状に気付いて愕然とした。

森の中の、別荘。

ここは一体、どこなんだ？

ここに来て何度目かのフリーズをしかけた所ではっと閃く。

そうだ！携帯！！！！

そう思いポケットを確認しようと目を自身に向けた俺はまた驚くことになった。

ムツキムキ・・・！何だよこのガチムチボディ！！！！

高校生で剣道を辞め、ろくすっぽ運動をしていなくてヒョロヒョロになっていた俺の体が見たことも無いほどムキムキだったのである。取り合えず自分の体が本物かペタペタと触ってみる。

まごう事なき筋肉で、更に俺の体である。キーボードばかり打っていた小綺麗な指はぶ厚い皮で守られた超ごっつい指になっている。そんな指で顔に触れ、輪郭を確かめてみる。

俺の顔は日本人特有の、彫りの浅い鼻も大して高くないそれは面長で鼻は高く彫りも深い、西洋人のようなそれになっていた。

4 話目

自分の顔に触れ、自分が全くの別人になってしまった可能性のある俺は途方に暮れてしまった。

まるで今までいた世界が、俺という存在が全くの出鱈目だったのかと思う不安と焦燥感。

出はこいつは一体誰だ？俺は一体誰なんだ・・・？

この肉体は今まで俺が来ていたスーツも、携帯電話もいつも胸ポケットに入れていたボールペンも、ない。

鍛えられた肉体にはそこそこ体にフィットするラフなシャツに厚手の黒のジーンズ、腕時計も無く去年新しく購入したはずのピアスも、ピアス穴もなく、少し癖のあったボサボサの黒髪は、短くカットされた金髪（一本抜いて確認してみた）になっていた。

本当に、自分の身に何が起きたのか、誰でもいい、何でもいいから確認したかった。

自分が自分である証拠が、一つでも欲しかった。虚ろになりながら、なにか希望を見いだせるような物は無いかとゆっくりと顔をあげ、辺りを見渡した。

正面には森、振り返れば誰の物とも解らない別荘。

そこでまた、俺はなんとも言えないデジャヴウを感じた。

見たことの無い別荘のはずなのに、まるで慣れ親しんだ家のように、何度も見たような、気がするのである。

別荘なんて物に縁のある生活など送ったことはない。

それに、こんな風に庭のある木造の家など雑誌やテレビでしかお目にかかれないだろう。

なのに何故か、俺にはこの家のどこに何があるか、この家の構造が、なんとなく解るのだ。

そこでまた俺は恐怖を覚えた。もしかしたら俺はこの世にいないくて、本当はこの外人を乗っ取ってしまった、この家の構造が解るのはこの男の記憶なのではないだろうか。

それはつまり、俺は無意識に一人の人間を消してしまったのかも、しれない恐怖と、この体の本当の意識はただ眠っているだけで、目覚めてしまえば俺は消えてしまいかもしれないという恐怖だった。

どちらにしろ、この家には自分以外の人間はいない事を確信した俺は、家へ入る事にした。ガチャリと玄関を開け、そっぴえば鍵付けてねーや無用心だなオイ。と思いつながら中に入り鍵を掛ける。

洗面所のドア前に立ち、ほんの少しの希望と悲しいほどの確信にため息をつき、深呼吸をしてドアを開く。

当然ながらそこには俺の顔はなかった。

そこで何度目かのデジャヴ。

無表情な外人の顔はすごく知っている誰かに似ていた。

5 話目

自分が乗っ取ってしまった外人の顔を見た俺はものすごく引っ掛かりを覚えた。

何と言うか、答えが喉元まで来ている気がする。

俺の知り合いの外人なんて海外企画部から挨拶しに来たに来たボブ位しかいねーぞ。

誰だっけコイツ？ハリウッド俳優に似てるっちゃ似てる来もしなくも無いが、なにか違う気がする。しかしイケメンだ。モテるんだろうなあコイツ。もげる。あ、でも今もげたら怖いのは俺か。やっぱ今の無し。

なんつつーか、イマイチ顔と体のパーツが合っていない気がするよな。何かとって付けたよーな感じた。どこがどうおかしいって聞かれると困るんだが。

しかし何やったらこんなにもキムキになるんだか。・・・でけえ。

外人の・・・何て言うか、負けた。くそ。

・・・取り合えずこれ以上見ても何も進展しなさそうだと判断した俺は他の手掛かりを探すことにする。

自分が眠ってた部屋に入り取り合えずベッドを調べる。

やはり、自分の携帯など、私物が見つからずがっかりする。
ここは俺のいた世界じゃねーんだ・・・やっぱり・・・

ハア・・・とため息をつき、今度は箆笥の横にある木箱を漁ってみる。

何のか解らない木の実と、ビー玉みたいな玉と包帯みたいにまとめられた布が乱雑に沢山入れられ、厨二病な感じのアクセサリーが結構入っていた。

この外人はどうやら邪気眼使いなのかもしれない。お前とはいい酒が飲めそうだ。

そう思いながら、俺は木箱の横をチラリと確認した。

堂々と置かれた大きなソレ。そう、ある意味大本命の宝箱である。

寝室にあるところを見ると、ぼうRPGの様にモンスターになって襲ってくる事はないだろう。だが、一体何が入っているのやら・・・

考えてもらちが開かない。金銀宝石が入っていれば、なんて淡い下心を胸に俺はその箱を勢いよく開けた。

それを見た瞬間、俺は今までのデジャヴュの答えを知り、更なる絶望を味わった。

そこには、
今まで俺が作り、彼が着ていたであろう装備が入っていた。

MMORPG、【アオブベーション】というゲームの世界で。

5 話目（後書き）

やっとこさ気付きました。

システムについてはネットゲはニワカプレイしかしていないのでちょっとおかしな部分とか出てくると思います。

あといろいろなゲームの設定をチョコチョコ織り交ぜる予定なのでとんでもネットゲになると思いますが、暇つぶしに読んでいただければ幸いです。

そんな訳で俺は「NET」と無駄にスタイリッシュにかっこよくデカデカとプリントされた鎧を見て、自分がゲーム世界に来たことに気付き、現在頭を抱えている訳である。

今までなんで気付かなかったのかと思っただが、基本的にプレイヤーの視点は斜め上からの角度だし、マイキヤラクターも背後を向いている訳だ。視点が全く違う。

何より自分がネトゲ世界に入ったなんて非現実的な状況に誰が行き着くか。漫画じゃあるまいし。と言うことだ。多分。

そんな事を自分に言い聞かせ、俺はこれからの事を考えることにする。取り合えずどうしたものか。

もしこれが2次創作的展開だったら俺自身を選べる展開は大体2種類だ。

1、メインキヤラと遭遇して、俺が強ければ先導、弱ければ彼等に寄生・・・じゃない協力してもらい帰る術を探す。

2、メインキヤラとの遭遇を極力回避して、帰還方法を探す、または現実に帰るのを諦め細々と生活を送る。

この2つだ。

1の場合大概キヤラ達と仲良くなって、帰るまでの葛藤があったり、おにやの子ならフラグが立ってついでに永住フラグだったり。

2の場合は帰還方法を探すと高確率でキヤラとブッキングし逃げようとして追われ、色々フラグが立ち、

諦めると遭遇率は下がるし結構ほのぼのと生活できる確率が高い。というのが結構俺の読んだ2次創作では多いパターンだと思う。

・・・2次創作好きだよ文句あつか。

ついでに言つとトリップモノは当事者になると本気で洒落にならないことがよく解つた。特に何の説明も無く飛ばされた時は。

取り合えずそれは置いておいて、俺はこのあとどう身を振るべきか・
・しかしよく考えるとネトゲのメインキャラって普通に考えれば
自分自身だよなあ？

何この初っ端から詰んだ感。

せめてここに送ってきたチート与えてくれる神様とか、都合よく出てくるコイツの知り合いとかがいれば・・・!!

「誰か説明する・・・」

俺の声は誰もいない部屋に虚しく響いた。

7 話目（前書き）

読んで頂きありがとうございます。思った以上にアクセスして頂いているようで驚いています。これを励みに頑張りたいと思います。至らぬ所も多いと思いますが、目に留めて頂ければ幸いです。

7 話目

しばらくの間、何の気力も出ず呆けていた俺は、返事が無いのは当然だがそれでも返事が無いのがっかりし、再度ため息をついた。

どうしろってんだマジで。

ここがゲームの世界という事は解ったがその後どうするかに思い至らない。何をどうすればいいというのだ。

取り合えず何の手掛かりも無いので、安全と思われるこの家を荒らしてみることにする。

うーん、じゃあ取り合えず筆筒かな・・・

寝室にある筆筒を眺める。

2メートルちょいある筆筒は上半分が開き戸で、下半分は引き出しだ。

開き戸を開けてみることにする。

上質なローブと、皮でできたお洒落なズボン、シンプルなブーツに手触りの良さそうな手袋、ちょっと固そうな帽子にピアス、ネックレス、ブレスレット、指輪に後は杖とナイフ。

どう見ても装備一揃えです本当に（ry

ついでにリュックと・・・全力で場違いなモノが一つあった。

「戦闘力・・・たったの5か・・・ゴミめ・・・」

ヘッドホンの片方だけでもぎ取ったようなモノに赤いビー玉みたいなのが2つ収まっていて側面からは赤いアクリル板のようなものがくの字に曲がる形でくっついていてる。

どう見てもス　ウターのパチモンです本当にありがとうございます。赤はレアだぜ・・・

取り合えず何に使うアイテムなんだろう。何かもつスカ　ターにか見えない。戦闘力を計るんですよね？

そんな事を考えながら俺はそれを手に取り観察してみる。存在自体が怪しいが、全体的にはレンズ付き片耳ヘッドホンだ。どうやって取り付けるんだろうか。

でもこんなのがキャラの顔についていた記憶はないし、寧ろ付いたらネタにするわ。クランメンバーで某乳製品特選隊のポーズもとるわ。お命頂だい！！！！

まあどこに付けるかは解らんが一度も耳に付けずに放置する訳にはいかんだろう。という訳で俺のロマンのためにクッション部分を耳に押し当ててみる。

ここでやらなきゃ男じゃねえ！

クッション部分を当てた瞬間、それはプシュツと音を立て、肌に吸着する形で俺の耳に固定された。これで勝つる！！

よっしゃあどんな感じか確認タイム！！！！

バタバタと階段を駆け降りズサーツと洗面所に入り顔を確認する。
これで俺も冷蔵庫一味・・・アルエー

鏡に写した俺の顔には付いているはずのスカウターは見当たらなかった。ナゼ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900y/>

MMO生活

2011年11月3日02時07分発行